No.39/2022

図書館文化史研究

日本図書館文化史研究会

●特別講演●
保存活動からみた「文化船ひまわり」の歴史的意義について　植田　佳宏　1

●論　文●
戦時期京都帝国大学の文献疎開における
和漢書の選定に関する研究　川口　朋子　21
占領期図書館統制の研究 ―宣伝出版物篇―　小黒　浩司　43
加藤宗厚と日本十進分類法標準化をめぐる検討　藤倉　恵一　97

●研究ノート●
深川恒喜研究のための予備的考察
(付 深川恒喜著作目録暫定版)　根本　彰　173

●資料紹介●
ナチス・ドイツの禁書目録・推薦図書目録　松井　健人　201

●書　評●
和田敦彦解説『戦時期 早稲田大学学生読書調査報告書』
―早稲田大学図書館「学生図書閲覧成績調査」の
紹介とともに―　藤原　秀之　227

ISSN　1342-6761　日外アソシエーツ発行

［特別講演］

保存活動からみた「文化船ひまわり」の歴史的意義について

日本図書館文化史研究会　2021 年度研究集会・総会
2021 年 9 月 18 日　オンライン開催

植田 佳宏（うえた よしひろ）
（広島県立図書館）

抄録

文化船「ひまわり」（以下「ひまわり」という。）は 2021 年 7 月 22 日「全国にも例を見ない離島の人々の為の移動図書館船」と評価され，日本船舶海洋工学会の第 5 回「ふね遺産」に認定された。

ひまわりは 1981 年の巡航廃止後，離島に行った移動図書館サービスが特筆すべき存在であったとして，広島県の生口島で保存・展示されてきた。しかし，展示後 30 年あまり経過し，老朽化が進み図書館関係者からも語られることは少なくなっていた。その後，2015 年 2 月には，管理する尾道市教育委員会から解体・撤去方針が出されるなど，ひまわりは忘れられた存在となっていた。

しかし，解体・撤去方針から始まった地元住民によるひまわり塗装作業等の活動が，その後のひまわりの意義を後世に伝える住民レベルでの草の根的な保存活動の端緒となった。

広島県立図書館に保存されている資料調査や当時の利用者インタビューから，ひまわりの巡航は離島の中学校の高校進学率の向上にも影響があったことが判明した。これらのことからひまわりによる離島への移動図書館サービスは「アウトリーチ・サービス」のひとつであったと考える。

1. はじめに

広島県立図書館の植田です。皆さまには，ぜひ広島に来ていただいて，実際に文化船「ひまわり」（以下「ひまわり」という。）を見学していただければと考えていました。しかし，現在もコロナ禍が継続しており，対面でのリアル開催は困難ということで，オンラインで発表させていただきます。

これまでにひまわりの保存活動等に関しては『図書館雑誌』[1] や，本日参加されている滋賀県の梅沢幸平先生の御紹介で『図書館車の窓』[2] にも

書かせていただきました。また，十文字学園女子大学の石川敬史先生や東北学院大学の泉山靖人先生には，実際にひまわりの展示場所を訪問していただくなど関係者のこれまでの御支援には深く感謝しております。

実は，船による離島への移動図書館サービスを行っていたひまわりに関する先行研究はなく，まとまった資料も広島県立図書館（以下「県立図書館」という。）が発行したひまわりの歴史等をまとめた『航跡』[3]という冊子しかありません。しかし，この冊子には，巡航年度ごとの貸出総数はありますが，巡航した島ではどういった分野の本が借りられていたかといった統計や分析はありません。今回の発表にあたり当時の各種の資料を県立図書館の倉庫を探してみました。そうすると一部ですが関係資料を見つけることができましたので，当時の離島の利用状況などを報告できればと思います。

広島県は日本一のレモンの生産県です。この写真はレモンの花です。ひまわりが保存・展示されている生口島（尾道市瀬戸田町）はレモンの産地で，今の時期は島の畑にはグリーンレモンが実っています。

ひまわりは，1962年から全国唯一の移動図書館船として離島の人たちに本の貸出しや映画フィルムの運搬や上映等を行っていました。しかし，1970年代から島々に橋が架かり始め，老朽化も進んだことにより1981年7月31日に廃止となりました。広島県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）では，廃止後にこの船をどうするのか議論がされました。広島県内だけでなく，遠くは茨城県の図書館情報大学が引き取るという話もあったそうですが，運送費用をどうするのかということで頓挫したようです。

そのような中，当時の瀬戸田町の和気成祥町長から県教育委員会に「島々に文化を運んでいた船は大切なものなので，瀬戸田町で引き取りたい」という要望があり，ひまわりを受け入れてくださいました。それ以降，瀬戸田町（現尾道市瀬戸田町）で保存されてきました。その後，30年という歳月が経つ中で，屋根はあるものの吹きさらしのような展示場所でひまわりは老朽化が進んでいきました。展示場所はスポーツ施設の前庭にあり，子どもたちの遊び場となっていました。そのため施設側からは尾道市にひまわりの展示は危険であるという意見が出されていました。

そこで，2015年2月に尾道市教育委員会から解体撤去の方針が出され，尾道市議会でも解体撤去費用が承認され，解体業者も決まっていました。そんな時に地元医師の永井晃さんが，地域の集まりで「あの船はもうなくなるそうだよ」という話を聞いて，「あの船のことが知られないままで撤去

されるのはもったいない」と思ったそうです。そこで永井さんは仲間たちに声をかけて，手弁当でひまわりの修復作業を始めました。こうした地元からの保存運動が始まったことで，尾道市教育委員会は解体撤去の方針を一旦保留としました。永井さんたちは「何もしないでいるといつかは無くなってしまうだろう」と修復活動を一緒に行ったメンバーが中心となって地元の人に「ひまわりのことをまずは知ってもらう」ための活動が始まりました。

今回の「ふね遺産」認定のニュースを新聞等でご覧になった方も多いかと思います。ひまわりは「全国にも例を見ない，離島の人びとのための移動図書館船」であったことが評価されました。これまで「ふね遺産」に認定された船は，船体構造上のことが評価されていました。しかし，ひまわりが評価された点は「船の構造よりも文化的に果たした役割が評価された異色のケースである」と審査委員の吉川孝男九州大学名誉教授からコメントがありました。本日は，20年間離島に文化を運んだひまわりの役割と空白の約30年を経て，6年前から始まったひまわりの保存活動と歴史的意義について報告をしたいと思います。

2. ひまわり建造について

ひまわりは，1961年9月22日に江田島造船所で建造が始まりました。2018年3月に江田島造船所を保存活動メンバーで見学をしました。ひまわりの沿革等を紹介したこのレモン色のリーフレットの印刷費用は，当時の江田島造船所社長の出木谷学さんが保存活動に共感されて「そういう保存活動だったら寄付をさせてください」ということで100万円寄付していただいたお金をもとにして作ったものです。ちなみに，江田島造船所で新しく建造中の造船所の作業船の名前には「ひまわり」と名付けられたそうです。

出木谷社長さんの話によると江田島造船所は昔の場所から会社が移転したため，古い資料は処分され残っていないそうです。そこで，県立図書館が所蔵するひまわりの設計図にあたる船体線図をPDF資料としたものを江田島造船所に寄贈しました。図書館だけが貴重な資料を持っていたら，あってはならないことですが資料の破損や劣化等の可能性も考えられますので，ゆかりのある江田島造船所でもデジタル資料を保存してもらうことにしました。ちなみにこの船体線図のデータは「ふね遺産」申請の際にも活用されました。

編集後記

特別講演，論文，研究ノート，資料紹介，書評と昨年と比べて多彩な内容で構成しております。特別講演は昨年オンラインで行われた研究集会の成果になります。また過去に例をみない厚さとなっております。

来年以降も引き続き，会員のみなさまには研究発表の成果をご投稿していただきたくお願いいたします。

なお，昨年の会員総会で「『図書館文化史研究』投稿規程・執筆要領」が改訂されました。本会のウェブサイト（http://jalih.jp/）に載せていますので，ご投稿の際には，どうぞ，ご確認ください。

最後になりましたが，刊行についてかわらぬご尽力をいただいている日外アソシエーツ（株）編集局のみなさまに，お礼を申し上げます

2022年7月31日

泉山靖人（東北学院大学）
新藤　透（國學院大學）
鈴木宏宗（国立国会図書館）
三浦太郎（明治大学）
横山道子（神奈川県立藤沢工科高等学校図書館）

編集委員50音順

図書館文化史研究（年刊）
第39号　2022年9月25日発行
編集　©日本図書館文化史研究会　〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学司書・司書教諭課程
発行　日外アソシエーツ株式会社　〒140-0013　東京都品川区南大井6-16-16
電話03（3763）5241㈹　鈴中ビル大森アネックス
印刷・製本　株式会社平川工業社　表紙デザイン　津田ミナ子
ISBN 978-4-8169-2936-6